

世代間における養育態度の変容を 規定する要因の検討

横浜市緑区役所
横浜国立大学教育学部

遠 西 信一郎
高 本 真 寛

Factors determining intergenerational changes in parenting attitudes.

世代間における養育態度の変容を 規定する要因の検討

Factors determining intergenerational changes in parenting attitudes.

遠西 信一郎*・高本 真寛**

アタッチメントと愛着の内的作業モデル

養育者と被養育者との間の関係性を記述するとき、アタッチメント(attachment)が重要な概念の1つに挙げられる。アタッチメントとは、「ストレスフルな状況において、特定の他者との物理的・心理的な近接によって安心感を得ようとする傾向」であり(Bowlby, 1968/1982)、個人の愛着の状態と質に関する包括的な用語として用いられている(Holmes, 1993 黒田・黒田, 1996)。

ボウルビィによると、アタッチメントは安定型アタッチメント(secure attachment)と不安定型アタッチメント(insecure attachment)に分けられ、それぞれのタイプは愛着対象に対して異なる反応を示す。幼児は愛着対象との持続的な相互交渉を通して愛着対象および自己に関する心的表象、すなわち愛着の内的作業モデル(Internal Working Model: IWM)を形成し(戸田, 1991)、愛着のIWMは当人のその後の人間関係のあり方を規定する。したがって、アタッチメントは乳幼児と主たる養育者との関係性のあり方を説明する以外にも、幼児期以降における一般他者との関係性を捉えるときにも有用な視点を与えてくれる。

愛着の内的作業モデルと養育態度

養育者との間で形成された愛着のIWMは、当人が養育者となったときの子どもに対する養育態度と関連することが示唆されており、養育態度の

世代間伝達を説明しうる。例えば、大村・山磨・松原(2001)は安定型の母親が不安定型、回避型の母親と比べて自らの子どもに対する強い愛着を感じることを明らかにした。また、森下・木村(2004)は自らの被養育態度と養育態度との間の相関が高いことを示し、過去の自らの母親との関係性を自らの子どもに重ね合わせていることを示唆した。さらに、島(2014)は大学生を対象に被養育態度と愛着のIWMとの関連を検討し、母親の養育態度に対する否定的評価が、不安傾向や回避傾向の高いIWMにつながり、社会的適応の困難へと至ることを明らかにした。

上記以外にも、養育態度の世代間伝達について検討した研究は多く見られる。例えば、山口(2008)は親の養育態度を肯定的に評価しているほど、一般他者への「親密性回避」や「見捨てられ不安」が低い傾向にあることを明らかにした。その他にも数井・遠藤・田中・坂上・菅沼(2000)や渡辺(2000)、橘(2000)など、多くの研究成果の蓄積が見られる。以上の知見をふまえても、母親の養育態度が子どもに対して連続的な影響力を有していることがうかがえる。

虐待の世代間伝達

「虐待の世代間伝達」は社会的問題の1つに挙げられることがある。Cicchetti, Rogosch, & Toth(2006)は子どもへの虐待によって不安定で無秩序な愛着の見られる親子と、虐待が見られない親子との比較研究を行った。その結果、虐待をする母

*横浜市緑区役所

**横浜国立大学教育学部

親の多くが自らも重度の虐待やネグレクトを経験しており、自らの母親との関係性が悪いことや不適切な養育行動が見られ、育児ストレスを強く感じていることを明らかにした。また、新宮(2006)は親・乳幼児精神療法を用いて虐待相当行為が見られる2例の事例分析を行っている。その結果、母親の主訴や子どもの症状の背景には、誘発因となったエピソードだけでなく、母親の被養育体験に対する未解決な心の葛藤による世代間を通じた恨み、怒り、不安等の感情が関与していた。厳しい親の元で十分に甘えることができなかったという母親自身のトラウマが、育児を通じて母親の無意識的記憶を思い起こさせ、子どもはその投影対象となっていると考察されている。なお、Briere & Jordan(2009)によると、経済的な問題や差別による社会的不利などの社会文脈的要因、親の心理的不安といった家族機能の低下などが虐待の世代間伝達を促進するとした。

上記は虐待という具体的行為の世代間伝達である。それに対して、渡辺(2000)は虐待の世代間伝達と同様に負の世代間伝達である「葛藤の世代間伝達」を、「親自身が受けた心の傷や親子関係の葛藤が、誰にも理解されぬままに心に深く抑圧され続ける時、何気ない日常生活のふれあいの瞬間に、思わず無意識的に子どもに伝わること」と表現した。子どもとの間で親自身の親子関係の特徴を反復し、親子関係の葛藤が連鎖していくことであり、虐待という行動だけでなく、行為に至る前の心理的影響についても世代間伝達が生じる可能性がある。

養育態度を形成する規定因

Belsky(1984)は養育態度を規定する諸要因に関する文献を精査し、それらを統合したプロセスモデルを作成している。このモデルに基づくと、養育態度の規定因は「養育者の要因」(養育者の成

育歴や成育歴によって形成された養育者のパーソナリティや精神的健康など)、「子どもの要因」(子どもの気質や行動特徴といった子どもの特徴)、「社会文脈的要因」(夫婦関係と社会的ネットワーク、仕事)に整理される。

これまでの研究では、仕事や子どもの数、経済状況や周辺環境といった家族ステータスやソーシャルサポートが養育態度と関連することが示されている。例えば、渡井・松嶋・錦戸(2006)は、ワークライフコンフリクトの高さが父親における受容的な養育態度の低さと関連し、母親における児童放任やネグレクトに繋がしやすい責任回避的な養育態度の高さと関連することを示した。また、子どもの数が増えると充実感の低さや育児拘束感の高さと関連すること(寺見他, 2008)、第一子の母親は第二子以降の母親よりも育児ストレスが高いこと(桑名・細川, 2007)、経済状況の悪さと母親の抑うつ傾向に関連が見られること(草野・小野, 2010)、子どもの遊び場の存在が子どもの発達と関連することなどが示されている。これらの結果をふまえると、家族ステータスやソーシャルサポートはそれぞれ養育態度と直接的・間接的に関連すると考えられる。

養育態度の世代間伝達に関する研究の整理

上述した議論をふまえ、養育態度がどのように世代間伝達しうるかを整理する。養育者と被養育者の関係性を記述する際の有用な概念であるアタッチメントは、愛着のIWMの形成に寄与し、本人の対人関係の在り方を規定しうる。また、被養育態度と養育態度との間に関連が見られたことをふまえると、上記の対人関係の在り方の中に本人の子どもに対する養育態度も含まれると考えられる。さらに、これまでの養育態度や愛着に関する研究手法は(1)養育者自身が養育態度を評価する方法(橘(2000)など)、(2)被養育者が被養育体

験について評価する方法(八越・新井(2007)など)、(3)第三者が養育態度を評価する方法(数井他(2000)など)の3つに大別される。

他方、Belsky(1984)のプロセスモデルが示すように、養育態度は親子の相互作用によって規定するにも関わらず、先行研究では親子相互の養育態度・被養育態度への評価に基づいた研究が十分になされていない。子育てをする際、母親は自らの母親の姿を思い起こしたり、自らの母親との関係性を自らの養育態度に重ね合わせたりする(新宮(2006)など)。世代間伝達の理論を前提とするならば、親子それぞれの養育態度と被養育態度を検討することで、養育態度の世代間伝達や養育態度の規定要因を、親子相互の視点を踏まえた新たな考察が得られると考えられる。

目的

本研究では、世代間における養育態度の変容可能性とその規定因の検討を行う。規定因については養育環境として育児環境に関連する変数およびソーシャルサポートを扱う。また、世代間の養育態度の変容を検討するために、母子データを収集し、それぞれの養育態度を測定することによって、上記の目的を検討する。

方法

調査協力者と手続き

2017年11月に首都圏の国立大学・私立大学に在学する大学生とその母親を対象に実施した。大学生の有効回答者は160名(男性110名、女性50名;平均年齢20.3歳、 $SD=1.44$)、母親の有効回答者は81名(平均年齢49.9歳、 $SD=4.00$)であった。親子データにおける有効回答は69組であり、母親に回答を求めた自由記述の有効回答は81名であった。

心理学に関する教養科目の講義時間を利用した

集団実施および個別配布によって調査を実施した。調査票について、大学生用調査票は紙媒体の調査票とWeb調査票を併用し、母親用調査票はWeb調査票を用いた。集団実施においては、大学生に紙媒体の調査票を配布し、調査内容の説明、母親用調査票にアクセスするためのURLを母親へ送付、調査票への回答の順に行われた。個別配布では、第一著者が個別に調査協力者にWeb調査票を送付し、上記と同じ手順によって行われた。

大学生と母親にはそれぞれ大学生の生年月日と名前 of イニシャルによって構成される識別IDの記入を求め、この識別IDによって親子データのマッチングを行った。

質問紙の構成

大学生用調査票 調査票は(a)表紙、(b)母親用Web調査票のリンクとなるQRコード、(c)母親の養育態度に関する項目、(d)フェイスシートによって構成された。

1. 母親の養育態度を測定するために、伊藤他(2014)の「養育態度尺度」35項目から、「肯定的養育」(関与・見守り、肯定的応答性、意思の尊重)と「否定的養育」(過干渉、非一貫性、厳しい叱責・体罰)から因子負荷量の高い7項目をそれぞれ選択し、計14項目を用いた(4件法)。
2. フェイスシートとして、年齢、性別、家族構成についてそれぞれ回答を求めた。

母親用調査票 調査票は(a)調査協力に関する依頼文、(b)母親の小学生期における母親の養育態度、(c)母親の子育て期における自身の養育態度、(d)母親の子育て期のソーシャルサポート、(e)母親の子育て環境、(f)自由記述、(g)フェイスシートであった。

1. 小学生期における自身の母親および自身の子育て期の養育態度を測定するために、大学生用調査票と同じく、伊藤他(2014)の養育態度尺度

から肯定的養育と否定的養育の各7項目、計14項目を用いた(4件法)。なお、母親自身が行った養育については同一の項目を用い、母親が受けた養育についてはそれぞれの項目の文頭に「母親は」や「母親と」を追記した。

2. 子育て期のソーシャルサポートを測定するために、手島・原口・原口(2003)の育児ソーシャルサポート尺度の「育児ヘルプ」と「居場所づくり」から因子負荷量が高いことと配偶者に関係しない項目であることを基準としてそれぞれ3項目と6項目を選定し、合計9項目を用いた(4件法)。
3. 母親の子育て環境を測定するために、平谷・本田・法橋(2016)を参考に、経済状況や居住地に関わる物質的環境であることを基準にして3項目(「家計の経済状況は安定していた」「保健・医療福祉サービスを身近で受けることができた」「公園やデパートなど、家族で出かけられる場所が近くにあった」)を用いた(4件法)。
4. 母親の養育についての意識を把握するために、「子育てををするときに意識したことはありますか」と「自分が受けた子育てと比べて、自分がした子育てについてどう思いますか」と尋ね、自由記述で回答を求めた。
5. フェイスシートとして、年齢、子育て期に就労していたか否かと雇用形態(「正社員」「パートタイマー」「アルバイト」「派遣社員」「契約社員」「嘱託職員」「その他」)、雇用時間(「1-34時間」「35-40時間」「51-60時間」「61-65時間」「66-70時間」「71時間以上」)について回答を求めた。

結果

得点化の手続き

養育態度に関する諸変数とソーシャルサポートに関する得点化は、それぞれの尺度における得点化の手続きに従い、因子ごとに測定値を加算し、

項目数で除した平均値を算出した。子育て環境については、それぞれ単項目で測定しているため、各測定値を用いた。また、それぞれの養育態度の得点の差を算出することで、「被養育者の視点に基づく世代間伝達」(「母親の被養育態度」得点から「子どもの被養育態度」得点の差をとった数値)、「母親の視点に基づく世代間伝達」(「母親の被養育態度」得点から「母親の養育態度」得点の差をとった数値)、「養育態度に対する母子間の認識のずれ」(「母親の養育態度」得点から「子どもの被養育態度」得点の差をとった数値)を指標化した。分析には、上述した養育態度、ソーシャルサポート、養育環境、世代間伝達や養育態度に対する認識のずれに関する諸変数を用いた。

養育環境と養育態度に関する分析

各変数の記述統計量を Table 1 に示す。養育態度の変数に関して、肯定的養育態度に関する変数間では有意な正の相関が見られた($r_s=.25-.51$)。一方、否定的養育態度に関する変数間では母子間の変数で有意な相関は見られなかったが($r=.14, n.s.$)、残る2つの変数間で有意な正の相関が見られた($r=.43, .48$)。

他方、養育環境との関連において、「居場所づくり」は子どもの肯定的被養育態度との間に有意傾向の正の相関が見られた($r=.22, p<.10$)。また、「経済状況」は母親の肯定的養育態度との間に有意傾向の正の相関が見られ($r=.21, p<.10$)、子どもの否定的被養育態度および母親の否定的養育態度との間に有意な負の相関が見られた(それぞれ $r=-.27, -.35$)。加えて、レジャー施設は母親の肯定的・否定的養育態度との間に有意な相関が見られた(それぞれ $r=.29, -.27$)。ただし、育児ヘルプおよび医療・福祉は養育態度に関する変数との間に有意な相関が見られなかった($r_s=-.16-.11, n.s.$)。

Table 1 養育態度、ソーシャルサポート、養育環境に関する諸変数の記述統計量

1 “子どもの肯定的被養育態度”	—										
2 “子どもの否定的被養育態度”	-.36**	—									
3 “母親の肯定的被養育態度”	.25*	-.02	—								
4 “母親の否定的被養育態度”	-.15	.14	.01	—							
5 “母親の肯定的養育態度”	.51**	-.21†	.42**	-.28*	—						
6 “母親の否定的養育態度”	-.23†	.48**	.03	.43**	-.40**	—					
7 育児ヘルプ	.08	.00	—	—	-.04	-.01	—				
8 居場所づくり	.22†	-.13	—	—	.10	-.08	.31*	—			
9 経済状況	-.01	-.27*	—	—	.21†	-.35**	.23†	.13	—		
10 医療・福祉	.05	-.16	—	—	.11	-.09	.15	.23†	.38**	—	
11 レジャー施設	.19	-.10	—	—	.29*	-.27*	.17	.30*	.43**	.33**	—
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
<i>N</i>	69	67	60	58	68	68	69	66	67	68	68
<i>M</i>	3.0	1.8	2.6	1.5	3.0	1.8	2.8	3.6	3.3	3.4	3.5
<i>SD</i>	0.60	0.52	0.67	0.45	0.51	0.50	0.87	0.45	0.76	0.57	0.60
α	.84	.79	.88	.86	.84	.87	.86	.84	—	—	—

† $p < .10$, * $p < .05$, ** $p < .01$

3および4と7~11との間の相関係数に関して、母親の被養育態度と自身の養育環境との間には時間的乖離があり、両変数間に相関関係を理論的に仮定できないため、算出していない。

「きょうだい構成」と「子育て期における仕事の有無」によって養育態度やソーシャルサポートに関する変数に差が見られるかを検討した。その結果、「きょうだい構成」では、第一子 ($M=1.84$, $SD=0.56$)の方が第一子以外 ($M=1.63$, $SD=0.35$)よりも「否定的養育態度」が高い傾向にあったが ($t(65.97)=1.87$, $p < .10$)、それ以外の変数において、統計的有意差は見られなかった ($ts=0.33-1.37$, $n.s.$)。他方、「子育て期における仕事の有無」では、仕事なし群 ($M=3.17$, $SD=0.52$)が仕事あり群 ($M=2.94$, $SD=0.48$)よりも「肯定的養育態度」の得点が高い傾向にあり ($t(46.76)=1.74$, $p < .10$)、仕事あり群 ($M=2.93$, $SD=0.83$)の方が仕事なし群よりも「育児ヘルプ」の得点が高かった ($t(47.65)=2.00$, $p < .05$)。上記以外の変数においては、2群の間に統計的有意差は見られなかった ($ts=0.01-0.91$, $n.s.$)。

養育環境と養育態度のずれに関する分析

先述した得点化の手続きに基づいて、「被養育

者の視点に基づく世代間伝達」「母親の視点に基づく世代間伝達」「養育態度に対する母子間の認識のずれ」に関する変数を得点化した。各変数の記述統計量を Table 2 に示す。上記の変数において、養育態度のずれがあるかを検討するために、ずれの得点と0との間に統計的有意差が見られるかを検討した。その結果、母親の肯定的・否定的養育態度のずれ(それぞれ $t(55)=4.37$, $p < .01$; $t(57)=3.64$, $p < .01$)、母子間における肯定的・否定的養育態度のずれ(それぞれ $t(57)=3.47$, $p < .01$; $t(57)=3.17$, $p < .01$)において、0との間に統計的有意差が見られた。

「きょうだい構成」と「子育て期における仕事の有無」によって養育態度のずれに差が見られるかを検討した。その結果、「きょうだい構成」では、いずれの変数においても統計的有意差は見られなかった ($ts=0.10-0.92$, $n.s.$)。他方、「子育て期における仕事の有無」では、母親における養育一被養育態度の肯定的側面のずれにおいて、仕事なし群 ($M=-0.54$, $SD=0.54$)の方が仕事あり群

Table 2 世代間伝達および養育態度の認識のずれに関する諸変数の記述統計量および *t* 検定結果

	<i>n</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>min</i>	<i>max</i>	<i>t</i>
1 母親における被養育－養育態度の肯定的側面のずれ	56	-0.36	0.61	-1.86	1.43	4.37**
2 母親における被養育－養育態度の否定的側面のずれ	58	-0.24	0.51	-1.29	1.00	3.64**
3 母子間の肯定的被養育態度のずれ	58	-0.32	0.70	-2.00	1.29	3.47**
4 母子間の否定的被養育態度のずれ	58	-0.27	0.65	-1.86	1.14	3.17**
5 母子間における肯定的養育態度に対するずれ	67	0.04	0.51	-1.14	1.14	0.61
6 母子間における否定的養育態度に対するずれ	67	-0.06	0.54	-1.43	1.14	0.88

***p* < .01

1および2は被養育者の視点に基づく世代間伝達を表す指標、3および4は母親の視点に基づく世代間伝達を表す指標、5および6は養育態度に対する母子間の認識のずれを表す指標である。

Table 3 養育環境が世代間伝達および養育態度の認識のずれに及ぼす影響の重回帰分析結果

	母親における被養育－養育態度のずれ		母子間の被養育態度のずれ		母子間における養育態度に対するずれ	
	肯定的側面	否定的側面	肯定的側面	否定的側面	肯定的側面	否定的側面
育児ヘルプ	.07	-.30*	.11	-.10	-.20	.03
居場所づくり	-.07	.02	-.03	-.02	.07	-.05
経済状況	.00	.24*	.05	.07	.20†	-.16
医療・福祉	.04	-.05	.15	-.03	.19†	.02
レジャー施設	-.08	-.07	-.10	-.01	-.15	.06
雇用時間	.15	.07	.19	-.01	.05	-.14
<i>R</i> ²	.08	.16†	.09	.14	.14	.05
<i>adjR</i> ²	.00	.08	-.07	.06	.06	-.04

† *p* < .10, **p* < .05

(*M* = -0.25, *SD* = 0.62) よりもずれの得点が高い傾向にあったが(*t*(43.47) = 1.78, *p* < .10)、それ以外の変数では、2群の間に統計的有意差は見られなかった(*ts* = 0.30 - 1.46, *n.s.*)。

次に、養育環境(ソーシャルサポートや家族環境)と養育態度のずれとの関連を検討するために、変数間の相関係数を算出した。その結果、肯定的養育態度のずれに関する変数では、母子間の肯定的被養育態度のずれと雇用時間との間に有意傾向の正の相関が見られ(*r* = .30, *p* < .10)、母子間における肯定的養育態度に対するずれと経済状況との間に有意な正の相関(*r* = .29, *p* < .05)が見られた。他方、否定的養育態度に関する変数では、母親における被養育－養育態度の否定的側面のずれと育児ヘルプとの間に有意な負の相関がみられ

(*r* = -.32, *p* < .01)、母子間における否定的被養育態度のずれとレジャー施設との間に有意な負の相関が見られ(*r* = -.27, *p* < .05)、母子間における否定的養育態度の評価のずれと雇用時間との間に有意傾向の負の相関が見られた(*r* = -.25, *p* < .10)。

養育環境が養育態度のずれに関する変数にどのような影響を及ぼすかを検討するために、養育環境の6変数を説明変数、養育態度のずれに関する変数を基準変数とした重回帰分析を行った(Table 3)。その結果、母親における被養育－養育態度の否定的側面のずれにおいて、養育環境による決定係数に有意傾向が見られ(*R*² = .16, *p* < .10)、育児ヘルプが負の関連を示し(*b*^{*} = -.30, *p* < .05)、経済状況が正の関連を示した(*b*^{*} = .24, *p* < .05)。

母親における養育に関する意識の自由記述内容

母親自身が行った子育て、および自身が受けた子育てとの比較を通して自身の子育てをどのよう
に思うかについて、自由記述で得られた内容を第
1著者と心理学を専攻する大学生3名、合計4名に
よる合議によって分類した。その結果、「子育て
をするとき意識したことはありますか」に対す
る回答では6つの大カテゴリが得られ、「自分が受
けた子育てと比べて、自分がした子育てについて

どう思いますか」の回答では5つの大カテゴリが
得られた(Table 4)。

第1の設問の自由記述で得られた大カテゴリ
は、「親態度」(子どもの前でどのような態度でい
るか、子どもにどのように接するかに関する内容
を含む)、「子育て環境」(母親が子育てをするう
えで、家庭内における環境整備に関する内容を
含む)、「人格形成」(どのような子どもに育ってほ
しいと考えていたかに関する内容を含む)、「社会性」

Table 4 子育てに関する母親の自由記述内容の分類結果

大カテゴリ	カテゴリ	記述例
親態度	きょうだい平等	兄弟がいたので習い事など、全員平等になるように意識していた。
	尊重	子供自身も1人の人間として尊重するように心がけた。
	傾聴	怒る時は、必ず子どもの意見も聞く、納得できるように話す。
	寄り添い	学校から帰ってきた時、家に母親はいるようにした。
	理性的親	子どもの前で不満や愚痴を言わない。
子育て環境	家庭づくり	子どもが心から安心できる家庭づくり。
	夫婦協力	夫婦で共通の価値観を持つこと。
人格形成	素直さ	素直ないい子に育つこと。
	思いやり	他人の痛みの分かる子になって欲しい。
	自立	自分のことは自分でできるようにしつけること。
社会性	経験促進	出来る限り多くのことを学ばせたかった。勉強に限らず運動神経なども。
	マナー	挨拶をする事。
健康	規範意識	自分がされて嫌なことは、他人にしない。
	健康	子供が病気しないように丈夫な体になるようにしっかり食事をつくる。
無我夢中	無我夢中	初めはただ一生懸命。育てるだけで精一杯。
	自由	自分の時より自由になることがたくさんあった。
肯定的評価	関わり	自分の子供の頃より子供と関わるが多かった。
	子ども優先	子供との時間を大切にした。
	関係促進	友達関係のようななんでも言いやすい関係を築くことができたと思う。
	物理的充足	学校や教育関連の行事には積極的に参加した。
	比較・反省	感情的になって子どもを叱ってしまうこともあり、過去の母親と自分が重なり、自己嫌悪に陥ることも多々あった。
否定的評価	多忙	母との違いは、共働きのため、日中の様子が確認できなかった。
	類似	怒らない(話し合いで解決、理解し合う)という点で、結局自分が育てられたように育てているのだなあと感じました。
見直し	向上	自分が受けた子育てをベースにして、いい部分はなぞり、変えたい部分は改善した。
	反面教師	私は長女でしたのでしっかりしなさいと育てられました。それがイヤで自分の子供には長男次男も関係なく子育てしたつもりです。
子育て理解	苦勞	理想的な母親であろうとして、自分も子どもも苦しさを感じていた。
	時代格差	自分の母は大変厳しかった為、自分は子供に対して厳しさのハードルを少し下げた。時代背景に違いがあるので、これは致し方ないと思う。

表中において、表上部(二重線より上)が第1設問に関する自由記述の分類結果を、表下部(二重線より下)が第2設問に関する自由記述の分類結果を示す。

(子どもが社会で生きていくうえで身に付けてほしいことに関する内容を含む)、「健康」(子どもの経験や健康といった、子どもがより良い生活をするために求められることに関する内容を含む)、「無我夢中」(子育て中に特に意識したことはなかった内容を含む)であった。他方、第2の設問の自由記述で得られた大カテゴリは「肯定的評価」(自分が受けた養育に比べて、よい養育ができたと評価する内容を含む)、「否定的評価」(自分が受けた養育と比較したり照らし合わせたりして、自分の養育を否定的に評価する内容を含む)、「類似」(自分の受けた養育と自分の養育が類似している内容を含む)、「見直し」(自分の受けた養育よりも、より良い養育をするように意識したことや、あえて異なる養育を行ったことに関する内容を含む)、「子育て理解」(子育ての大変さや時代によって子育てが変わることに気づくなど、子育てへの理解が深まったことに関する内容)であった。

続いて、仕事の有無ときょうだい構成、養育態度のずれの方向性の観点から、上記の自由記述内容の切片数を整理した¹⁾。第1の設問の自由記述では、以下の傾向が見られた。まず、仕事の有無において、仕事をしている場合には「尊重」「寄り添い」「思いやり」「無我夢中」の切片数が多く、仕事をしていない場合には「傾聴」の切片数が多かった。次に、きょうだい構成において、第一子の母親では「傾聴」「無我夢中」の切片数が多く、第一子以外の母親では「きょうだい平等」の切片数が多かった。母子間の被養育態度のずれおよび養育態度に対するずれでは、肯定的養育の側面で「尊重」「寄り添い」「思いやり」の切片数が正の値の者で多く、「健康」の切片数が負の値の者で多く見られた。また、否定的側面においては、「きょうだい平等」の切片数が正の値の者で多く、「自立」「健康」の切片数が負の値の者で多く見られた。さらに、母親における養育態度のずれでは、肯定

的側面において「素直さ」の切片数が正の値の者で多く、「傾聴」の切片数が負の値の者で多かった。

他方、第2の設問の自由記述では、以下の傾向が見られた。まず、仕事の有無において、仕事をしている場合には、「比較・反省」「類似」「反面教師」の切片数が多く、仕事をしていない場合には「子ども優先」の切片数が多かった。次に、きょうだい構成において、第一子の母親では「子ども優先」の切片数が多く、第一子以外の母親では「関わり」の切片数が多かった。母子間における養育態度のずれでは、否定的側面で「関わり」の切片数が負の値の者で多く、母親における養育態度のずれのずれでは、否定的側面で「比較・反省」「反面教師」の切片数が負の値の者で多かった。

考察

本研究では、養育態度が世代間でどのような関連をもつか、および子育て期における養育環境やソーシャルサポートが養育態度とどのような関連を有するかを、母子データによって検討した。

被養育者の視点に基づく世代間伝達

母子それぞれの被養育態度において、肯定的養育態度は正の関連が見られたが、否定的養育態度は関連が見られなかった。他方、母子間の被養育態度のずれに着目すると、肯定的・否定的養育態度のいずれにおいても母子間にずれが見られた。このことから、全体的な傾向としては、世代間で養育態度が関連するが、特定の親子レベルで見ると、必ずしも養育態度が一貫していないことがうかがえる。したがって、全体的傾向としては、被養育者側の視点に基づく養育態度の世代間伝達が見られるが、親子間に完全な一致は見られないことが示唆される。また、その中でも、肯定的養育態度においてのみ母子間で正の相関が見られた理由には、IWMが安定型の母親が子どもに対する

愛着を高い状態で安定させることができる(大村他, 2001)ためと推測される。また、自由記述の内容分析の結果から、養育に関する関わりの中でも「尊重」が肯定的養育態度に大きく関与すると考えられる。

母親の視点に基づく世代間伝達

母親における被養育態度と養育態度において、肯定的・否定的養育態度はともに正の関連が見られた。子育て中の母親は自らの母親と自らの姿を無意識に重ね合わせやすい(新宮, 2006)。自由記述の内容分析の結果では、「比較・反省」の回答が多く見られ、「類似」の回答が肯定的・否定的養育態度に関わらず多く見られている。したがって、母親は様々な場面において、自身の被養育態度と養育態度を重ね合わせていると考えられる。ただし、被養育態度と養育態度のずれに着目すると、両者には確かなずれが見られる。すなわち、被養育者側の視点に基づく世代間伝達と同じく、全体的な傾向としての世代間伝達は見られるが、母親個人としての養育態度には一定の変容性が認められることがうかがえる。

養育態度に対する母子間の認識

母親による養育態度に対する母子それぞれの評価では、肯定的・否定的養育態度それぞれで正の関連を示し、母子間における養育態度の評価にずれも見られなかった。したがって、母親自身が認識する養育態度を、子どもは同程度に認識し、両者の間に大きな乖離は見られないと推測される。自由記述の内容分析の結果を通して、子どもは「尊重」や「寄り添い」、「思いやり」といった温かな情緒的関わりを強く認識していることがうかがえ、こうした情緒的関わりのある養育が、母子間における養育態度に対する認識の共有につながったと考えられる。

きょうだい構成および仕事の有無と養育態度

きょうだい構成と仕事の有無と養育態度との関連について検討を行った。その結果、第一子の母親は第一子以外の母親と比べて否定的な養育態度をもちやすく、仕事をしていない母親は仕事をしている母親と比べて肯定的な養育態度をもちやすいことが示された。また、第一子の母親や仕事をしている母親では、子育てにおいて「無我夢中」と回答している割合も多い。第一子の母親は第二子以降の母親と比べて育児ストレスが高いこと(桑名・細川, 2007)や仕事をしている母親は責任回避的養育を高めること(草野・小野, 2010)などを鑑みると、精神的・時間的なゆとりの少なさが、情緒的関わりのある養育態度の形成を妨げうると考えられる。一方で、育児ヘルプの充実が母親の否定的な養育態度を抑えることを考慮すると、他者からのサポートが養育者—被養育者の関係性において重要であることが改めて指摘できる。

養育環境と養育態度との関連

本研究における検討を通して、育児ヘルプや福祉・医療、レジャー施設および居場所づくりの充実が、養育者—被養育者における安定した養育態度の形成に寄与することが示された。これらの結果は、草野・小野(2010)が明らかにした「育児環境の不備」が母親の抑うつ傾向に影響することを確証する証拠として位置づけられるだろう。また、服部・原田(1991)は「天気の良い日の遊び場」が家の外であることが言語・社会性の発達や操作性運動の発達といった子どもの情緒的側面の発達を促進することを示している。本研究で扱った変数のうち、レジャー施設を上記の指摘に沿って解釈すると、レジャー施設の有無が養育者—被養育者との間で触媒として機能することで情緒的な関わりを生み、結果として安定した養育態度の形成に寄与したと考えることができるだろう。

他方、経済状況の悪さや育児ヘルプの充実、養育者―被養育者における安定した養育態度の形成を妨げることが示唆された。経済状況については、経済状況が悪い母親ほど抑うつ傾向が高い(草野・小野, 2010)ことに起因する結果と解釈できる。渡辺・石井(2009)は、「育児ヘルプ」が育児に対する対処行動の積極性を高め、育児ストレスの軽減効果につながることを示しており、本研究における結果と相反した。一方で、過大な育児ヘルプの受領は母親の自尊心や自己効力感の低下、結果として抑うつ傾向の高さを招き、被養育者との関係性にも悪影響を及ぼしうる。したがって、援助内容や被援助者である母親の状況によってはサポートがネガティブな影響を与える恐れ(菊島, 2003)をふまえた支援が求められる。

今後の課題

本研究における課題には以下の2点が挙げられる。第1は母親の感情に焦点を当てる必要性である。ソーシャルサポートは抑うつ傾向や自己効力感を媒介して養育態度に影響を与えること(渡辺・石井(2009)など)をふまえると、今後はソーシャルサポートの受領時における母親の感情を含めた検討が必要と言える。第2は母親が養育時に抱く意識の多様性を考慮する必要性である。本研究を通して、母親の養育態度に対する意識が、養育者―被養育者という関係性における養育態度の連続性を理解する上で重要であることが示唆された。今後、さらなる検討を行うことによって、子育てと向き合う母親への理解を深め、精神的サポートを充実させることにつながると考えられる。

脚注

1) 自由記述をそれぞれの要因ごとに整理した切片数の一覧表については、紙幅の都合上割愛した。詳細について確認したい場合には、著者ま

で問合せされたい。

謝辞

本論文は、第1著者が平成29年度に横浜国立大学教育人間科学部に提出した卒業論文を再構成したものである。本調査にご協力いただいた学生およびその親御さんに謝意を表します。また、自由記述の分類には、阿部栞里さん、鈴木風哉さん、樋口万里子さんにご協力いただきました。彼らにも、この場を借りてお礼申し上げます。

引用文献

- Belsky, J. (1984). The determinants of parenting: A process model *Child Development*, 55, 83-96.
- Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and loss: Vol. 1. Attachment*. New York: Basic Books.
- Briere, J., & Jordan, C. (2009). Childhood maltreatment internening variables, and adult psychological difficulties in women: An overview. *Trauma Violence, and Abuse*, 10, 375-388.
- Cicchetti, D., Rogosch, F., & Toth, S. (2006). Fostering secure attachment in infants in maltreating families through preventive interventions. *Development and Psychopathology*, 18, 623-649.
- 服部祥子・原田正文(1991). 乳幼児の心身発達と環境：大阪レポートと精神医学的視点 名古屋大学出版会.
- 平谷優子・本田順子・法橋尚宏(2016). 島嶼部で暮らす子育て期家族の家族支援ニーズ：家族環境評価尺度(SFE-J)を用いた都市部との比較 家族看護学研究, 22, 15-25.
- Holmes, J. (1993). *John Bowlby and Attachment theory*. London: Routledge. (黒田実郎・黒田聖一(訳)(1996). *ボウルビィとアタッチメント理論* 岩崎学術出版社)

- 伊藤大幸・中島俊思・望月直人・高柳伸哉・田中善大・松本かおり…・辻井正次(2014). 肯定的・否定的養育行動尺度の開発：因子構造および構成概念妥当性の検証 発達心理学研究, 25, 221-231.
- 数井みゆき・遠藤利彦・田中亜希子・坂上裕子・菅沼真樹(2000). 日本人母子における愛着の世代間伝達 教育心理学研究, 48, 323-332.
- 菊島勝也(2003). ソーシャル・サポートのネガティブな効果に関する研究 愛知教育大学実践総合センター紀要, 6, 239-245.
- 草野恵美子・小野美穂(2010). 社会的な要因に関する育児ストレスが母親の精神的健康に及ぼす影響 小児保健研究, 1, 53-62.
- 桑名佳代子・細川 徹(2007). 1歳6か月児を持つ親の育児ストレス(1)—母親の育児ストレスと関連要因—東北大学大学院教育学研究科研究年報, 56, 247-263.
- 森下正康・木村あゆみ(2004). 母親の養育態度におよぼす内的ワーキング・モデルとソーシャルサポートの影響 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 14, 123-132.
- 新宮一夫(2006). 世代間伝達と子育て支援—親・乳幼児精神療法による分析—鈴鹿医療科学大学紀要, 13, 61-72.
- 大村典子・山磨康子・松原まなみ(2001). 周産期における母親の内的ワーキングモデルと胎児および乳児への愛着 日本看護科学会誌, 21, 71-79.
- 橘 浩太(2000). 親の被養育体験を媒介とした、養育態度の世代間伝達に関する検討 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 47, 462-463.
- 寺見陽子・別府悦子・西垣吉之・山田陽子・水野友有・金田 環・南 憲治(2008). 今日の母親の育児経験とソーシャル・サポートの関連に関する研究(1)—子ども家庭支援センターを利用する母親の育児ストレスとその要因—中部学院大学中部学院短期大学部研究紀要, 9, 59-71.
- 手島聖子・原口雅浩(2003). 乳幼児健康診査を通じた育児支援：育児ストレス尺度の開発 福岡県立大学看護学部紀要, 1, 15-27.
- 戸田弘二(1991). Internal Working Model 研究の展望 北海道大学教育学部紀要, 55, 133-143.
- 島 義弘(2014). 親の養育態度の認知は社会適応にどのように反映されるのか：内的作業モデルの媒介効果 発達心理学研究, 25, 260-267.
- 渡井いずみ・松嶋幸代・錦戸典子(2006). 両親の就業が養育態度に及ぼす影響—低学年児童に焦点をあてて—研究助成論文集(明治安田こころの健康財団), 42, 190-199.
- 渡辺久子(2000). 母子臨床と世代間伝達 金剛出版.
- 渡辺弥生・石井睦子(2009). 乳幼児をもつ母親の育児ストレスにソーシャル・サポートおよび自己効力感が及ぼす影響について 法政大学文学部紀要, 60, 133-145.
- 八越忍・新井邦二郎(2007). 母親の養育態度が小学生の社会的スキル、共感性、学級適応に及ぼす影響 発達臨床心理学研究, 18, 33-40.
- 山口正寛(2008). 回想された両親の養育スタイル認知が青年期の愛着表象に与える影響 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 1, 1-9.
- 山口淑子(2006). 母親における養育態度と自身の受けた養育態度との関連について 龍谷大学大学院文学研究科紀要, 28, 16-35.